

Title	河田学士 岡本学士共著 日本の経済と仏教
Sub Title	
Author	松本, 彦次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1912
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.4 (1912. 10) ,p.781(187)- 792(198)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19121000-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

河田學士共著 日本の經濟と佛教

明治四十五年七月京都法學會發行
大判一六〇頁正價六十錢

福田博士の日本經濟史論と内田博士の經濟史總論の二書を除けば組織立てられたる經濟史を有せざる我學界に河田岡本兩學士の手になられたる本書の新にあらはれ、しかも前二書の一般的史論に重きを置けるに此等は佛教を中心とする特殊の新研究たることは我經濟史界を益正確に根柢ある研究を基とし綜合的經濟史論を完全に近づかしむるの點に於て其有益の著書たるを信す。我日本の歴史より佛教をとらば其分量の幾分を失すると明かなり。佛教に關する事項のみを抽出せんとせば殆歴史に關する著書全體をよまさるべからざる困難あるとは史學者の何人も認むる所著者の苦勞に對しては感謝の外なし。

批評と紹介

たゞ此種の著書の始めての試みが常に幾多の缺點あるは不得已事にして多少の缺點ありともそれは此書の價值全體を計る程度のものあらず。

歴史問題については泰西の學界にも幾多の學者ありて各獨自の意見を述べたりと雖未だ何等の決定を見ず。ベルグソンの新哲學現れて新なる火の手をあげ益其論の盛にならむとする傾向あるは今日より注意を要す。史學者は稍もすれば史實の記載と史論（本書に従へば普通に謂ふ所の歴史と歴史哲學）とを區別して別物の如く考へ兩者多少混交の點あるも一部分に過ぎざる如く考ふるは説明の便宜としては可ならむも史學本來の性質による區別と思はゞ誤を生ずるにあらざるか。

歴史研究の對象は實に人生なり。即ち時の繼續と共に展開する人類活動の狀態なり。其範圍は廣大なる森羅萬象なり。口碑口傳文書記録等の吾等に表現せられたるものについても其數殆

批評と紹介

無數なり。吾人の一生を七十と假定せんか我國の記錄文書のみを以てしても五十年を費して五十分の一を讀む能はざるべし。此等の口碑文書を取捨するにも必ず吾人の判断批評を待つ事多し。煉瓦師が崩されたる煉瓦を積むが如く羅列的のものにならずにあらず。此等史實の連結が外的のものにならば此種の歴史は全く無用の長物なり。著者は『史實を材料とし客観的に觀察して這間に存する因果關係を闡明し依て以て人類進化の理法は如何なるものなるを討究するものにして他は史實を史實として編述し各時代に於ける經濟狀態の如何様のものなりしかを示すもの之なり』と云へり。然らば觀察と云ひ編述と云ひ其言葉の意義は如何。編述は藁を束ねて薦を編むの類か。歴史は時の繼續を離れて存する能はず。然るに事實のみが因果關係なく個々に存するものならば歴史は成立し能はざるものといふ可きなり。編述するに觀察を離れ因果關係を

ば材料の供給は岡本學士の手になれる由なれば河田學士の責任にあらざらむも材料取集にも充分注意を拂へたらばと思はるゝなり。史料集收の點に於て甚遺憾多く、編著の勞力を餘りに重要ならざるところに用ゐたるは惜みても餘あり本書の缺點は根本史料の極めて乏しきにあり其參考書の中にも根本史料を基とせるもの割合に多からず。比較的史料に忠實なる史學雑誌及歴史地理を参考せる所案外に少しが如き、また甚しきは殆荒唐無稽に近き傳説を採用せるなど其不統一も亦甚し。今日史學者間に最も疑惑させらるゝ親鸞上人に關する記事も甚しく後世の編纂物たる上人御遺跡記によるよりも親鸞の孫に當る存覺上人の覺書に何故によらざりしか較手に入れ易しき本なり) 史料に寛大(?)なりし結果甚しき誤りを生じたり。八房の梅とか三度栗などは愚夫愚婦に上人を尊信せしむべく用

批評と紹介

ぬし僧侶等の方便たりしなり。『口碑今日に至るまで傳へられ他人尊信措かざるを見れば布教に先ちて農業等を教へ人心歸服の手段に用ゐたるにあらざるなきを得へんや』と記されしも口碑が親鸞以來今に傳はれる確證あらばともかく口碑の性質上何等の證あるべきにあらず。口碑の多くは如何なる場合に製作せらるゝものなるかを了解せられたりや。民族心理の研究法によればかくの如き早斷はなすまじきなり。越後高田に關する傳説『水田一夜に高田となり』とあるを著者は善意に之を解して聖人水田無用の地を乾田となさしめたる如く推察したるは地名由來の過半は後世の捏造たるの實例多きに注意を拂はれざりし爲ならむ。これ史實と云ふ事を外的存 在方面のみに重きを置きて史實の判断を輕視したる爲めなり。

史料判断について思ひ出ざるゝは三善清行なり。彼の封事程後世の學者を惑はしむるものな

無視し能ふものとなすならばそは外的排列を編述の意なりと誤信したるにすぎず史實の内的關係を明にし之を連結するならばそは著者の所謂歴史哲學と更に異なるところにあらず。愚管鈔作者が既に八百年前因明學を基とし因果關係を明かし政權の武家に推移したる有様を論せしはいふまでも無く歴史哲學なり。然るに此愚管鈔を参考して吾人が史を編述するとき此史論も亦史學も亦成立し得べし。記載的歴史と歴史哲學の區別の如きは科學的のものにあらず。編年體の舊歷史時代には説明の便宜としては存在すべき價值あらむも將來の新歴史には全く無用の區別なりと信ず。

本書編輯の缺點は史實と史論とを全然別の如く考へられたる結果か。史論と史實とは比較的縁の遠きものとなれり。河田學士の序文によれ

からむ。これ忘想誇大の支那思想にとらはれし
なり。支那民族の如く故意に數字を詐れるもの
他にあるなし。六國史時代の我歴史は此虚偽的
支那思想に捉はれて虚飾少なからず。三善清行
の論の如きは正鵠を得たるものにあらず。徒に
其聲を大にして針小棒大を振りまはせるて、あ
きる、計りなり『天下人民禿者實居其二』著者は
此言を正直に信じ大日本史まで引いて此數を是
認したる果して何等の根據がある。

封事は文書故史料としては一等以下のものに
あらず。一等史料故に信ずとなれば史實を單に
外的に重要視したるなり。日本人口の三分の二
剃髪すとは常識の判断のみにても此の如き事の
あり得べからざる事なるやを決し得べきなり。
僧侶の數三分の二にして他があらゆる職業の人
人なりとせば社會は到底生存する能はざるべし
此事實は免租の目的の下に百姓剃髪するもの甚
多く、寺院を隠所として此等の怠惰の群集其數

を加ふるを慨せし支那人的の筆法にして善行の
如き交通不便の時代は其觀察の範圍も狭く。官
吏の報告の如き不正のもの多數を占むる故に統
計なども却つてなきに優る位なり。此等の不完
全極まる數字の如き何等の價ある者にあらず。
經濟史の時代別を從來の一般史の區別に従へ
るは其物足らぬ感あり奈良朝平安朝鎌倉時代江
戸時代の區別の如き政治の中心地たる都會を標準
とは殆んど沒交渉なり。此舊年代別に隨つたる
結果本書は經濟史と云ふよりも一般史に近き記
載法にすぎざるの觀めり。是れ或は一般史研究
法を始めよりとりたるが爲經濟史としては内的
の方面に於て大なる缺點を來したるにあらざる
か。

經濟と佛教は著者も自白する如く一見殆んど
關係なきが如しそは世人の思ふ所ならんも經濟
史は佛教史にあらず。著者は僧侶を以て精神的

生活を送るものゝ如く考へまた僧侶と云へば人
格の高き特別のものゝみと考へたるは寧理想的
僧侶はかくあるべしとの事ならばうなづかる可
しと雖一般の僧侶にあて罵らるゝならば經世家
の議論としては兎に角事實を材料とする歴史と
しては事實を事實の儘に置く方却て可ならざる
か。何れの時代何れの處の僧侶なりと雖理想的
に生活するものは十分の一にも過ぎざること寧
當然の事にして僧侶の多くは俗人と餘りに異な
る人格を有する者にあらず。實生活を超越せざ
るは寧當然の状態のみ。一代に數十人の名僧あ
りて社會的感化に利益を及ぼす事珍しきにあら
ずと雖も內的研究を加へず五六の僧侶をあげて
當時佛教の隆盛かくの如しとの論法は早計に失
する場合なきにあらず。著者は經濟史を僧侶の
列傳とし皮肉の評を附したる傾あるは經濟史と
して餘りに僧侶の行爲を感情的に見たるにあら
ざるか著者は我國の農工業の指導獎勵を以て多

く僧侶の功に歸したるは當を得たるものにして
其動機を慈善心とし其活動を以て本書の骨子と
なしたる如し。換言すれば文明指導者としての
行為が直接間接に我經濟の發達を促したりとす
るものなり。僧侶を單に慈善及文明指導の者の
地位にありとしてその考のみより佛教と經濟の
關係を重要視したりとせば本書の價値は科學的
價値といふを得ずして僅にその部分的價値ある
のみなり。

著者は慈善的の設備（施療養育院の類）を以
て僧侶の人格に歸し方今之僧侶を罵倒せるの痛
快には著者の面目躍如たるものありと雖も一般
史ならば兎に角經濟史に於ては何となく物足ら
ぬ感あり。著者は慈善的財源を以て僧侶が諸國
に行脚托鉢し富人及び一般人民の喜捨淨財を以
て之れに充てたりとせり。近世史の始めに於て
は或は然らん之を以て奈良平安朝寺院の財源と
なすにはあらざるべし喜捨によつて得る財源と

寺領によつて得べき財源とを比較し其金高何れが多きか或は何れが一時的なるか永久的なるか或はいづれが確實不確實かは經濟史家の最も注意すべきにあらざるか。本書が經濟史眼を離れて感情史的となるの缺點は佛教史上眼目たる寺領と云ふ重要點に注意を殆ど拂はざるに至りそが價值の大半を失ひたるものなり。

此寺領に關して本書に論及したる所數員に過ぎざるは材料採集の點に於て全く用意を缺きたらずと云ふべし。著書は五頁に於て此頃諸國の大寺に有せし寺院の基本財産とも云ふべき寺領より生ずる收入云々と引用し六十七頁に『當時僧侶は人民を率ゐて無住の地移住民植民したりしこと、其頃朝廷より多くの田野を佛寺僧侶に賜はりし事實に徵するも明かなり。宗教が植民を伴ひ寧ろ僧侶の手に依りて植民を指導誘引すること歐洲諸國の海外植民史に照するも明確なる事實なるが此の事亦當時（奈良朝）我國に於て國內

なれども信仰の結果とが不可侵地となり却て惡民の隠所となり悪用せられたるの觀あり。平安朝には諸國々司の貪欲を逞しうするものありて百姓を虐待したことありたる爲一方懶惰なる百姓は其田地を寺領に寄進し、或は寺内に逃れて惡僧となり。寺領擴張と云ふ惡辣手段の機械となり風俗を亂したる罪恕すべからざるものありと雖も寺領が擴張したことと他より奪はれざる確かに於て豪族と對抗し得たるは經濟上重要な意味あることなり經濟史としては實に此點に意味あるものにして道徳的判断は道學者に任せて可なり。著者は寺領の耕民を奴婢か或は前述の怠惰者なるかをも考へず人民なる名のもとに概括したるは餘りに漠然たるものあるにあらずや。

我國に於て最も古文書のよく保存せられるものは寺院にして寺院の大なるものには校倉などの特殊建築物が本堂を離れて火災などには比較的

植民に行はれたりしを見る中略而して當時寺院僧侶に賜はりし土地は多くは未開の地にして下事なしと云ふも可ならん。然も此の重大なる事項は如何なる史料に基きたるか。單に『人民を率ゐ』など、漠たる見解を爲すことは讀者を誤らしむるの甚しきものなり。大日本古文書第五卷六百六十九頁に東大寺の奴婢帳目録あり。是れ人身賣買の好例にして上古耕作と奴婢との關係を見れば奴隸問題の解決を得べく著者の如く稍もすれば道徳論を以てするならば此等の事實を單に否道德的とすべし。道徳論ならばそれにも可ならむも經濟史として論せんには耕民として此等奴婢の權利を論及してこそ經濟史に價値あらしむるものにあらずや。三善清行の封事中に『諸國百姓逃課役逋租調書、私自落髮、猥着法服、如此三輩、積年漸多以下略』とあり。寺領の増加は朝廷の信仰あつきによりたること勿論

安全の地にあるもの多し。又土地所有に關する多くの文書は證據物件として保存の必要ありしない。千年以上の古文書のみにても萬を超ゆ可し。寺領の研究には最も都合よく然も出版せられたる大日本古文書等には寺領に關するもの無數あり。東大寺の墾田に關して其數字も正確にして誤殆なく。之を比較し綜合じたらんには奈良朝に於ける大寺の寺領なるもの一目瞭然として如何に我史界を益せしむる事の多大なるかを思はしむ。

高野山文書中の太田の庄に關する文書の如き時代より云へば最も大切なものにして王朝より鎌倉足利にかけて庄園の變遷即寺領の變遷如何を見るべく正確に領地に關する文書の纏りたる點に於て西洋にも其比なかるべしと信ず。此庄園の研究をしてこそ寺領より入る寺院財源の高に根據ある推論を得べく。布施寄進など漠たる收入などより經濟史に益する點は幾層倍なる

やも知れず。更に著者の居住地たる東寺百合文書五百餘冊の多きに寺領に關する文書の多き前二書より遙かに有益なるものあり。淀河々口に於ける入港税は東寺の收入たりし事、經濟史上最も興味あるもの、一にして此に關する史料も同文書にあり。奈良朝平安朝に於ける佛教の外的設備の盛んなる我史上に其比を見ずと雖も僧侶の人格と一部上流社會の信仰の結果にのみ歸するより寺領の收入の豊富と經濟的方面に重きをおきてこそ經濟史的價値あるものにあらずや。然れども寺領に關して史學者も經濟學者も此に關する研究らしき研究を發表せるものなし。史學に局外たる經濟學者に此史料選擇に注意を缺きたりと責むるよりはその研究を怠りし學者の罪を責むるを得たりとす可きか。此點よりも史學者經濟學者の間に關係少しことこそ我學界の罪なりと云はざるべからず。

僧侶の墮落を單に僧侶の品行不良と斷ずるよ

に於て却て劣る所あるは大に講究を要する問題なり。宗教の生命は信仰にあり。最も深き信仰を與ふる宗教ならば宗教として最も其使命を果したるものなり。信仰の結果人心慈善に赴きて慈善事業の發達するは自然の勢力にしてこの慈善事業は宗教の目的にあらず。奈良に慈善事業の發展したるは比較的規模の大なる慈善事業の發達したるを意味せるなり。社會の發達せざること著者の言の如し。鎌倉時代以後に於て人民の智識の程度思の外進歩せざるに團體的慈悲事業の發達せざりし所以は何ぞ。著者が此結果のみを慨し禪宗の出世間的な故に實世間に冷淡なりと論せしは一面の眞理を盡したるにすぎず。王朝佛教の信仰は内的要求よりも寧ろ幸福の獲得及其維持にあり。大刹の建築など外的功德によりて其報を得んとし、或は幸福の獲得に祈禱と云ふ奇異なる現象を來したり。貴族的佛

りも、其收入の過多にして奢侈なりしことが宗教家をして、廷臣のまねをなし牛車を驅り、華美なる裝をせる稚子を伴として其外觀を誇りたることを經濟上の原因に歸して説明しては如何。

著者の宿論は『世が宗教ニ期待スル所モ安心立命ヲ主トシ濟世救民ノ實世間的活動ヲ重視セズ僧徒亦敢テ多ク之ニ指ヲ染メント思ヒ寄ラズ。』と暗に僧侶の慈善的行爲の少なきを憤慨し僧侶が私欲一點張りに墮落するを諷諭たるは甚可なり。然れども著者は戰國時代は國民の困窮甚しく然かも人心一般に殺伐にして敢て救民濟世の事を顧る者なきの事情ある時僧侶が慈善救恤の方に活動すべき筈なりと説きて禪宗の盛なりし時代を罵倒せり。是れ大に研究すべきの問題なり。實人生を離れて宗教は存在するものにあらず。出世間を以て本色とする宗教あらは宗教の名を冠するに躊躇すべきなり。鎌倉以後の佛教は宗教として進歩したるに拘らず、救濟事業

教と稱せらるゝは此謂なり。されど平安末期より人心の動搖不安は內的要要求即個人の求道心となり、此が時代に生せし淨土宗真宗の如きは求道者に對する宗教にして內的苦悶を信仰によりて脱せしめしなり。されど禪宗淨土法華真宗などは舊來の貴族的佛教に比すれば後に起りたるだけ外的勢力に於て從前の眞宗天台に比すべくもあらず。財源の重なる寺領の如き之を王朝に比すべくもあらず。禪宗は幕府の保護をうけて比較的勢力あれども經濟上王朝時代の寺院に比して甚しく劣るは圓覺寺などの文書によりても之を知るべく。況や淨土真宗法華の如き中以下の人々を對手とする新宗教は其經濟に於てはあれむべき劣等の地位にありしなり。信仰に於て王朝にまさるも團體的慈善設備に於て王朝に比する能はざる所以なり。著者は此等の新宗教勢力を得ざるが故に王朝に比して團體的慈善事業劣等なる所以なりとせり。宗教の傳播範囲の

多少によりて慈善事業の多少を決せんとせしは善良の宗教よりは善良の慈善事業を生むべしとの精神的方面にのみ捉はれて、却つて經濟的方面に注意を拂はざりしが故なり、著者の言によれば眞宗の盛になりたる室町中世以後の眞宗の慈善事業の割合に起らざる理由に説明ありや。宗教の優秀如何は信仰の問題にして之より起る慈善事業は經濟事情と相俟つて之を見るべきものにして、經濟史の長所及存在の理由はこゝにあるを思ひ及ばざりしか。又慈善事業にも個人的慈善事業は團體的大規模の慈善事業あり。又時代によりて何れかが著しくおくるものにして團體的慈善事業と團體的慈善事業少しありて直ちに慈善事業衰微となれば早計なりと云はざるべからず。鎌倉以後の慈善事業は團體的よりも個人的になりたりや否やを研究して之を決すべきものにして、單に團體的慈善の衰微を以て禪宗の出世間的罪に歸すべからず。鎌倉時代以後に奴婢の廢止された

事情については何等の研究發表されたるものなしと雖も、王朝末葉より個人的自覺起り、宗教も個人的色彩を著しく帶びたるなど社會の進歩著しきものあり。是れ宗教的には鎌倉以後を以て出色ある所以となす理由なり。戰國時代には救濟を要する貧民多からざるも、一方より戦争の爲め商工業衰へ、寺領など豪族武家の爲めに横領せられ。慈善に出資すべきもの、數減じたる故に慈善事業の衰へたりとも解せらるべし。吾人は經濟史上には餘り重大ならざる慈善事業に比較的に多くの筆を費やしたるは本書の研究が經濟史的研究法よりも思想的方面に注意を拂ひ過ぎたるを惜しむ可きなり。

事實の綜合について列傳的傾向を帶びたる爲めに佛教以外のものとの關係に及はず。經濟的活動に對して佛教萬能的口吻に陥りしはせざりしか。一時代の綜合論についても著者の想像方が史實を逸して獨斷的の傾向なきにしもあらず

『要スルニ平安朝時代ハ其初期ニ於テハ文物大ニ發揚文明ノ彩華人目ヲ眩スルモノアリト雖モ漸クニシテ宮廷内部ニ於ケル王氏藤原氏ノ權勢爭奪起り延キテ朝政ノ上ニ及ビ軀テ終ニ藤原氏ノ勝利ト其專制横暴トヲ生ジ降リテ末葉ニ近ヅクニ至リテハ天下何トナク色メキ來リ物情頗ル平力ナラズ政綱自ラ弛ミ人心太ダ倦怠シテ山雨將ニ來ラントシテ風樓ニ満ツルノ概アリ』と「何トナク色メキ來リ」など文學上の形容にして因果關係を明にすべき此の如き形容は何等の要をなさざるなり。著者は物盛なれとは衰ふとか雨の來るに風樓に満つとか云ふを一つの因果的形容として之を用ゐんとするは不可なりとせずされど史實の説明なくしては全然文學的作品と歴史との差なきに至らむ。平安末葉は鎌倉の活動時代に入る準備時代否活動初期の時代にして源平二氏の武家が藤原氏の横暴を抑へ已れ之れ

にかはらむとする活潑なる時代なり。之を色めき來りと形容するか、然らば倦怠と此過渡期を形容せるは誤りの甚しきものにして武家の勃興は天慶の亂にきざし、藤原榮華の間に暗流となり保元平治の亂に其實力をあらはし、平安朝の公卿を無能力ならしめたるを著者は何によりて然か倦怠と斷せしか。著者は序文に於て歴史を以て事實の記載とし歴史哲學と其共通點甚だ少なきが如く考へたる結果史實と史論とを餘りに懸隔を生じたるにあらざるか。

其他室町時代に於ては僧侶は大抵幕府の顧問官となり政治經濟の方面に於ては却つて前時代より一層活動したり。此は政治的活動は外形のみ僧侶にして其實は俗人に等しからずとの故を以て此等の經濟上の活動を叙せざるか。臥雲日件錄東大寺日記日錄などは僧侶の經濟的方面に關する記事多くして然も正確なり。此等重要な史料に氣付かざりしは惜むべし。臥雲日件錄に

は金閣寺創立の費用及び室町時代の貿易船の事業を記せり。甲斐の妙法寺記には五六十年に亘る米價變動の記事ありて寺院の中心として當時の經濟事情を研究すべき事頃多々あるに拘はらず、本書は經濟學に最も縁遠き著書のみを参考し史實の如き口碑傳説すら區別せざる幼稚な參考書をも採用したる如き研究法に缺點ありて其努力の割合に効果舉らざりしは史學に縁遠き兩氏に對して誠に同情の念を禁する能はず。今一つは本書が其範圍廣大にあらゆる方面に涉りし精力には多大の尊敬を拂はざるべからず。然れども廣きのみが必しも最良の事にあらず。たゞへ一寺領たりと雖も詳細に之を極めて其性質を明かにし若しそれが代表的のものならば寺領に關する研究として泰西以上のものを生ずること敢て難きにあらず。廣さに深さを加へなば此書は益完全となりて天下の學者を益するの更に大なるものあらむ。史學專攻の故を以て消極的に

缺點を指摘したれども本書の積極的に長所多くして有要の著書たることは勿論なり、然も専門學問の爲めに提供せられたる著者の努力に重ねて感謝の意を表せんとす。言辭粗野にして禮を失するあらば幸に寛恕を乞ふ。（松本彦次郎）

Z
2N
14